

## 夫の死の二日前、長女を出産



—水越さんは陸軍演習場のあった旧三重郡千種村のお生まれだそうですね。亡くなられたご主人との出会いまでをお聞かせください。

「はい、千種村の尋常高等小学校、千種青年学校を卒業して、四日市の産婦人科医院に勤務しながら看護婦と助産婦の資格を取りました。助産婦の開業を目指して富洲原の助産院で助手をしながら修行をしているとき、川越村（現在の川越町）の人との縁談が持ち上がりました。その頃、川越で助産婦を廃業される方が見えるとの話を聞いて、縁談に乗り気になり、結婚したのが亡くなった主人と言っわけです」

—戦地で罹患、内地で死亡という、戦死としては珍しいケースですね。戦地でご主人を亡くされた方とは別な形での苦労があったのでしょうか。

「夫は独身時代、シンガポールで兵役中に事故に遭ったのがもとで罹患、内地に送還されて療養生活を送った時期があったようですが病気がおよそ回復して、当時の軍需産業でもあった名古屋の三菱発動機に勤務して

いた時に結婚しました。嫁ぎ先で助産婦としてのお得意さんも増えつつあって、その当時としては珍しい夫婦共働きで頑張りました。結婚三か月、戦時下ではありながら、やっと安定した生活が出来るようになったと思つたとたん、夫の病状が再び悪化して、昭和二十

（一九四五）年四月には寝たきりの重症になってしまいました。その頃、私は妊娠八か月の身重になっていて、主人の看病やら、自分の出産の準備、助産婦としての仕事、万一空襲に遭つた場合の避難の準備などでもう、何から手を着けてよいのやら、頭の中が混乱する状態でした」

—昭和二十年四月と言えば戦争がますます激しくなつて、普通に生活している人でも大変だった時、重症のご主人をかかえて、ご自分の体調管理、お仕事とかけもつて、心労の程がよく分かります。戦火の激しい中でのお産、ご主人のお葬式と続いたのですって？

「朝明川のほとりに住んでいましたが、対岸の高松地区に焼夷弾が投下されるようになって、いよいよこの次



三重郡菟野町福村 水越 しず

【プロフィール】大正九（一九二〇）年三月、三重郡千種村（現在の菟野町）生まれ。昭和十九（一九四四）年二月、看護婦・助産婦の修行中に二十四歳で結婚。ご主人は昭和十七（一九四二）年、シンガポールで従軍中、胸部を打撲したのが元で肺の病気を罹患、結果的に致命傷となった。従軍中の発病で昭和二十（一九四五）年七月七日に死亡、戦病死と認定された。

は自分の住んでいるところがやられると思って、衣類の半分を実家に疎開させて、空襲に備えました。今のように紙オムツなど無い時代ですから、自分の浴衣で生まれてくる赤ちゃんのオシメを作ったり、主人の看病は病院の薬はもちろんのこと、薬局でシップや温灸を買って温めたり、卵油を作って飲ませたり、人様が良いと言って下さることは何でもしましたが、病状は良くなるどころか悪化するばかりで、当時の日本軍の戦況と同じでした。空襲警報が発令されると、重症の夫に防空頭巾をかぶせ、いつでも避難できるように待機したこともあって、主人もつらかっただろうなあ、かわいそうだったなあと思っ

ています。主人の実家からもらったお米で（物々交換で）

## 「かわいらしい子やなあ、ご苦労さん」

乳母車を手に入れました。私は自転車にお産の荷物を積み、主人はもたれられるように乳母車に日用品を積んで、いつでも避難できる準備をしましたが、使用することはありませんでした。七月五日、予定日より一週間早く、女兒を無事出産しました。主人は生まれた子供の顔を見て『かわいらしい子やなあ、ご苦労さん』と大変喜んでくれました。翌日、主人は子供に『茂子』と名前をつけてくれました。その夜、主人の容態が急変して、次の日には帰らぬ人となりました。『ご苦労さんでした。子供は立派に育てますから』と心に誓い、冥福を祈りました。今考えてみると、主人はわが子の顔を見るため、名前をつけるために頑張って生きてくれた。娘からいえば、お父さんと顔を合わせるた

めに一週間早く生まれてきたのでは・・・と思うほど、二日違いの誕生と父（私から言えば夫）の臨終でした。時に昭和二十（一九四五）年七月七日。戦争が最も激しい中で通夜・葬儀でした。私は産後二日目で、葬儀には出られず、夫の妹が私の代役をしてくれました」

「父と娘の太い絆が二人をたった二日間の差で引き合わせたのですね。でもその後と言うものは、大変な道だったと思いますが。」

「母子家庭となったつらさはすぐ、葬儀の日から始まりました。当時は食糧難で、お米は貴重品でした。私た

ちの生活苦を見越して、香典代わりにお米をくれた方がありましたが、『それはおかしい』と強引に十円に代えられた悔しさは忘れられません。主人が亡くなった途端の冷たい世間の仕打ちに一晚中泣きました。しかし、そのおかげで私は強くなりました。産後八日目と十二日目に助産婦としての仕事が入り、無事お世話することが出来て自信ができました。産後しばらくは実家の母がお米持参で世話してくれたのでよかったです。母が帰って、配給米をもらいに行ったら『大人が、乳幼児に変わったので渡せない』と言われて米はなく、朝、昼はカボチャを代用食に、夕食は主人の実家で食べさせてもらいました。栄養不足で母乳が出ず、一カ月後も生まれた時の体重しかなく、医師の証明で

牛乳二本と砂糖半斤の配給を受けることができ、夜泣きも納まりました。産後十二日目にお産のお世話をした家までもらい乳に通ったこともありました。その頃はまだ戦争末期で、頻繁に空襲警報が発令されて、そのたびに子供を抱いて主人の位牌を大切に持って避難しました。四日市や桑名が空襲で焼かれた夜もお産の仕事があつて、暗い中でお世話したものです。産後四十日で過酷な戦争が終わりました。戦後はじめて明るいところでお産のお世話が出来た時には、『戦争が終わってよかった』と言う安堵感とともに、主人を亡くした悔しさと不安が入り混じって複雑な心境でした」

## 「その後の様子と現在の心境をお聞かせください。」

「昭和二十九（一九五四）年、助産所を開設するときの金策や、同三十四（一九五九）年の伊勢湾台風で被害を受けたときなど、母一人娘一人の生活は、戦後の物のない時代を乗り切るのが厳しかったです。娘にはひもじい思いをさせたり、成長するにつれて家事の手伝いもさせました。その娘も三十年余り、小学校の教員を勤めて今は退職し、孫、ひ孫に囲まれて安堵の日々を送っています。たくさんの方々のお助けやご好意で、今があるのだと思って感謝しています。最後に多くの戦没者の犠牲の上に、今の日本の平和と繁栄があることを肝に銘じて、真の恒久平和を祈っています」

# 子育て一途の生涯でした



私の夫「岩夫」は、昭和十二（一九三七）年一月に現役兵として久居の第三十三連隊に入隊し支那事変（日中戦争）に参加し昭和十四年八月に除隊して、昭和十六年十月に二度目の召集でマレー作戦に参加し昭和十八年一月に再度除隊してきました。

夫の両親は、病弱で農業もおぼつかなく、まして戦況もだんだん激しくなり、何時また召集が掛かるかわからない状況の中で私との結婚話も進み結婚しました。

時節柄、結婚式も無く親に言われるがままに嫁入りしてきました。夫の母は私の伯母に当たり、私たちはいとこ同士の夫婦で、当時、夫は二十七歳で私は十八歳の九つちがい、まだまだ世間知らずの娘でした。結婚後、他家の田畑も預かって夫と百姓に追われる毎日でした。すぐに子供を宿し幸せな日々でございました。そのような時期もつかの間、戦況もさらに激化し昭和十九年七月に、三度目の召集が掛かり、夫は出世して行きました。長男孝夫が生まれる四十日まえのことでございます。

夫はビルマ作戦に参加し、連隊旗の護衛兵として奮



息子さんと涙して話してくれた としさん

津市安濃町 斎藤 とし

【プロフィール】大正十四（一九二五）年四月、旧草生村（現在の安濃町草生）生まれ。昭和十八（一九四三）年、十八歳で結婚。妊娠中にご主人が出征。ご主人の帰還を待つも昭和二十三（一九四八）年に戦死の公報が届く。その後は、田畑を守りながら子育てに励み、現在八十四歳になり、四世代の家族で暮らしている。



戦中戦死したようでございます。

夫の出征後は戦火も激しく、長男が生まれたことを知らせるため、写真まで撮って準備しましたけれど、知らせるすべも無く知らせずじまいでした。いまだに心残りに思っています。あの人も、両親のこと、私たちのこと、百姓のことなど思いをはせながら、遠いピルマの地で、敵と戦い、飢えと戦い、病氣と戦い激しい戦火の中で、ひたすら軍旗を守り続けたと、近くの戦友さんから最後に会ったときのことなどの話を聞き、夫が軍旗と共に進んで行ったところから銃声が聞こえた。あの時にやられたのだろうという話を聞きました。

終戦直後三十三連隊の生存者の名簿が出され、夫の名前も載っていたのを見つけ、てっきり帰ってきてくれるものとはかり思って、待っていました。待てど暮らせど夫は帰ってきてくれませんでした。昭和二十三年に戦死の公報が届き、それには、「戦死したものとみなす」と書かれていました。白木の箱には名前が書かれた紙一枚でした。家族中がおどろきと、いらだちと、悲しみにおちいりました。

私は、病弱の両親、小さな子供をかかえ、どうしていいのか途方に暮れる毎日でした。幸いにも私の実家も近くで、親戚もあり、あらゆる事に目を光らしてくれていましたので、少しは気丈夫さもあり、守ってくれた事に感謝しています。

しかし、世間の目は冷たく、未亡人であるがゆえに何事にもその目で見られ、また、小さかった孝夫も子供なりに、肩身の狭い思いをしながら、父親の居る友

達を見るにつけ寂しさと、くやしさを堪えている姿を見るたび、女が父親の変わりには出来ず、「かわいそうになあ」と幾度思ったことかわかりません。

この子を守り立派に育てることが、夫へのなにより

の供養と思ひ直し強く生きることを決意して農作業や遺族会の活動に邁進しました。

孝夫も、私が毎日、田畑で仕事の汗水を垂らしている姿を見て、遊びたい思いを堪えて、よく手伝いをしてくれました。「あの人が生きていてくれたらなあ」と不憫でなりませんでした。

時は経ち、おかげさまで、孝夫もお父さんに似て大きな体に成長し、高等学校を卒業後農林省にご厄介になり、そ

の後、町内の娘さん綾子と結婚し二人で一生懸命働いて本宅の新築、離れの新築、農作業小屋、庭の整備など、家を盛り上げ尽くしてくれていて安心感に浸っています。

これで、「私の役目もやれやれ終わったなあ、お父さん がんばりましたよ、立派になった孝夫を見てやって下さい」と心で叫び、女ざかりを、なりふり構わず、子育てに邁進してきた苦勞も長かったような、短かったような思いで、肩の荷を降ろすことが出来ました。

今、八十四歳になり、子供、孫、ひ孫の四世代が同居して、幸せな暮らしをさせてもらっています。これも「あの人」やご先祖様、取り巻いてくれた方々のご加護と感謝しつつ仏壇に手を合わせています。



「私の役目もやれやれ終わったなあ、お父さんががんばりましたよ」

## 肝っ玉母さんの戦後



「ご主人が出征されたのは、いつですか、どんな思い出でしたか。」

「私が親元から帰って来ると、仏さんを見てみなと言われてな。仏さん（仏壇）にいくと赤紙（召集令状）が置いてあった。『子供をしっかり育ててほしい。それを楽しみに戦争に行ってくる』と言われた。親元の両親に『涙を見せてはあかん。涙を見せると涙で帰ってくる』と言われた。宇治山田駅まで送っていったとき、発車ベルが鳴ってな。泣いたらあかと言われた。ただ涙が止まらなかった。その顔を見せたらあかんと思って隠れていたら『俊子』『俊子』という声が聞こえた。きっと、私が見えなかったからやと思う。親戚の人がみんな私を探して、『なんやこんなところにいたのか、俊子、俊子、と叫んでいたやないか』と言われた。これが最後の別れだった」

「ご主人との思い出は。」

「親元へ帰ってくる時、駅まで送ってくれて、寒いからとくっついて歩いてくれた。迎えにきてくれた時、家

が近づくと離れて歩いた」

「戦死の公報がきたのはいつですか。暮らしは、どう変わりましたか。」

「昭和二十二年（一九四七）年、長男が二歳の時だった。『昭和二十年四月四日戦死』という知らせがあった。あの日は三月一日生まれやで、生まれるまでは生きとったんやな。」

公報があったんで、親類会議をしてもろてな。その時、家族はお義母さん、夫の妹・弟、私と子供だった。二十一歳の私は、家族を養っていくことができなくて、子供を置いて、まだ若いから嫁入りするように言われたが、私は『何もいらんで、子供だけは、どうしても欲しい。どんなことをしても、立派に育てる』と言ってな。それで、何ももらわんと子供を連れて、親元へ帰ってきたんや」

「子供さんと二人の暮らしでつらかったことは。」

「親元に子供を預けて会社にいった。会社は二交代で、



松阪市 中井 俊子

【プロフィール】松阪市に生まれ、二十歳で伊勢市の船大工の家に嫁ぐ。結婚三カ月で夫正吉さんが出征、その時、すでに妊娠していた。昭和二十一年（一九四五）年三月一日に長男が生まれる。終戦後、昭和二十二年戦死公報「昭和二十年四月四日北ボルネオで戦死」を受け取る。八十二歳の現在も、ものをつくることを生きがいに働き続ける肝っ玉母さんである。

朝は四時から十二時、夜は二時から十時までで、夜家に帰ってくると十二時だった。初めは歩いて通ったんやけど、新しい自転車は買えやんで、中古の自転車を買った。夜勤に行く途中、子供がはじめられているところに出会った。私が近寄るといじめていた子供は逃げてって、『僕は何にもせんになぐられたんや』と泣いていた。『早よ家に帰んな』といって、私は子供を送っていくこともできやんと、泣きながら自転車で乗って会社へ行った。

子供が四年生の時やった。台風がきて雨や風が強かったもんで、会社に電話して、休ませてほしいといっただけど、どうしても来てほしいと言われ、強い雨と風の中、会社に行って、帰ってくる時、堤防から自転車のまま落ちてしまった。水が多てな。もがいたけど流されていった時、背中を打つてな。それが杭やつてな。それにしがみついて堤防にはいあがった。そして、自転車を探しにいったんや。そしたら木に引っかかっただてな。それをどうにか引き上げて、自転車を押して家に帰ると、子供が戸が倒れてくるっていうて、両手で戸を押していた。怖かった。二人で泣きながら抱きあったんや」

—会社には何歳まで勤められたんですか。

「まだ来てほしいと言われたんやけど五十五歳でやめたんや。工場長さんに、『長い間勤めてもろたんやで記念品を』と言われてな、私は何か会社の名前を書いたものが欲しいと言ったんや。そいでもらったんがこれな

んや【写真】興和紡績松阪工場の名入りの立派な灰皿セット)。やめたときは、孫が幼稚園になつとった」

—会社をやめてからは、どうされたんですか。

「シジミとり（自宅が海岸の近く）をして、この離れを建てたんや。家族は、もうゆっくりと家にいたらというけどな、今は、野菜の苗づくりの農家へ行つとつてな。『俊子ねえさん今日は、何をしたらええんや』と家の人にいわれるほど任せれとつてな。

個人の人が苗を買いにくると、苗を売ったりしとるんや。勤定ができやんもんで、計算機を首にかけてな。朝八時から夕方五時まで、土日も休みなし、雨が降つてもハウスの中の仕事やで、休みがないもんで。私は朝五時に起きて、家族の朝ご飯の支度、洗濯をして、自分の弁当を持ってホンダのカブに乗って、家の畑をしてから行くんやわ」

—今の暮らしについて。

「孫が結婚するというので、別棟を建ててな。好きなようにしなと言つたら、一緒にご飯を食べさせてというてな。別棟には寝にいくだけや。息子とその嫁さん、孫とその嫁さん、それに曾孫二人の七人家族で一緒に居るんやわ。曾孫は『大きなおばあちゃん』『大きなおばあちゃん』と言つてくれ、私は、こんな幸せはないと思つている」

「私は、こんな幸せはないと思つている」



灰皿セット裏面



灰皿セット

## 健康で働けたことに感謝



—ご主人が出征した時はどんなでしたか。

「昭和十八（一九四三）年十二月五日、再度の令状をいただき入隊いたしました。昭和十九年の三月の末、千種の兵舎より出陣するとの噂を聞き、父に同伴を頼んで、二人の子どもを連れて急ぎました。四日市の駅まで着くと、窓を閉め切った汽車が次々と発車していき、面会できなかつたのか、ご婦人が放心したような涙顔で、持ってきた重箱を膝にポンとつけて、消えゆく汽車の煙をぼんやり見送っていた姿が忘れることができません。

兵舎の前ではかがり火が焚かれ、暮れゆく空を赤々と染め、緊急な空気が漂っていました。主人は三歳の長女と二歳の長男をかわるがわる抱きしめ、頬ずりをして別れを惜しみました」

—その時のご主人のお気持ちは、どんなだったでしょうね。

「どんな気持ちだったかと思うと胸がしめつけられます。どんな苦労があっても立派に育ててみせるぞ、と

いう気力がわいてきました。雪の舞う夜道を後ろ髪を引かれる思いで、子どもの寝息を背に感じながらあふれる涙も止めることもできず、四人でとぼとぼと帰りました。父のおかげで、二人の子どもを最後に会わせることができた幸せは、せめてもの安らぎです」

—その後の暮らしは、大変だったでしょうね。

「食糧事情が深刻となり、何もかも配給になりました。ヨモギをはじめ食べられる草、実を食べて飢えをしのぎました。頂いてあった大切な保有米も供出しなければならなくなり、取りに来て下さった方の足にすがり『持つて行ったらあかん』と泣いた子どもの姿に、ひもじい思いをさせられない、と一生懸命お願いして、一山越えた山深田を一反五畝作らせてもらうことになりました。鎌一つ持ったことのない素人ですが、必死でした」

—農業をしたことのないのに、大変だったですね。

「深田には『とぎ』と言って松の木を入れて沈めてあり



伊賀市青山町 浅野 よし子

【プロフィール】大正九（一九二〇）年五月二十三日生まれ。お寺に嫁ぎ、昭和十九（一九四四）年に夫を送り出した後、鎌一つ持ったことのない手で農作業、夜は和裁の内職で夜が明けた日も。必死に生き抜いた戦後の暮らし。

ます。その上を歩かないと腰まで沈んでしまうのです。上げるのには、手で土を上げ塗りました。通りかかった人が親切に教えて下さいました。消毒の噴霧器をお借りし、液一杯入れて田に入ったのはよかったです。が、どぎをふみ外して深みにはまり、動くほど沈んでしまつて、人の通るのを待つて引き上げていただいたこともありました。ただ主人の帰還を夢見てがんばりました」

「ご主人の戦死の公報が来て、その望みも断られたんですね。」

「その後、農地解放（注・GHQの指令で昭和二十二年―二十五年実施）で収入の道を断られ、村長さんから戦死の公報をいただいた時は、身も心もどん底に突き落とされた思いで涙も出ず、老いた両親のこと、子どもを思うと何日眠れぬ夜を過すしましたやら。父が亡くなればお寺にもいられず、住む家もなく、『どうしよう、保母の資格があれば親子で福祉施設に入れていただける』と思い、資格を取ろうと決心しました。昼は寺や境内の掃除、夜は一生懸命勉強しました。戦前お寺で農繁期託児所を十年程開設していて、少し経験がありましたので資格をいただくことができました」

「お子様を抱えて、働きつめに働かれた…」

「ちょうどその時の春、保育所が新設されて勤めるよう薦めて下さいましたが、老いた両親にお寺のことを頼んで出られず、あきらめて自給自足の生活をしようと思ひ、農繁期には日雇いに行きました。昼は農作業や毎日境内の掃除、夜は和裁の内職をさせていただき時間を忘れて、いつのまにか夜が白々と明けることがたびたびでした。でも、仕事をいただけましたことに感謝しておりました。今思うと、健康で働かせていただけましたことは神仏のおかげと、亡き主人が守ってくれたおかげ、老いた父母の協力のおかげと心から感謝をいたしております」

「お子様が立派に成人されたんですね。」

「長女は育英資金をお借りいたしましたして、アルバイトをしながら学業に励んで、片親だけだと保証人がなければ就職の難しかった時、立派に就職ができ、親らしいことの出来ぬのを苦にしておりましたら、逆に感謝されて心が痛む思いでした。長男はお寺を継ぐために東京の大きなお寺に置いていただき、お寺のお手伝いをさせてもらいながら大正大学に進学しました。初めて帰省した時のアカギレだらけの手を見て、涙がこぼれました。苦しいことは一言も言わず、育英資金をお借り

して、がんばっていました。そんな時、お寺の屋根が台風で飛び、建て替えせねばならなくなりました。そのうえ、その心労で突然脳軟化症で倒れ入院し、生死の境をさまよいましたが、神仏のご加護と、生きねばならぬという強い力で元氣を取り戻してくれました。

お寺の再建にはいろいろ苦しい事、辛い事もありましたが、檀家の皆様方のご協力で昭和四十（一九六五）年三月落慶法要の運びとなりました。長男も資格をいただき、稚児行列の先頭に入堂する姿に今までの苦勞が吹き飛び、大勢の方の心からのご援助と父母の協力が心から感謝の涙でございます。四十三年の六月三日に父が、同じ月の二十一日に母が、永眠いたしました。何の恩返しも出来ず悔いております。長男には同じお寺から良い嫁がきてくれ、父の亡くなる五日前に初ひ孫が生まれ、父母が大変喜んでくれました」

「今のお気持ちを聞かせてください。」

「同じ境遇の婦人部の方々のお励まし、どれだけ強い力で支えられましたやら。齢と共に体も不自由になり歩くことも出来なくなりましたが、命のある限り英霊の顕彰には全力を尽くしたいと思ひます」

「神仏のおかげと、亡き主人が守ってくれたおかげ」

# 夫の戦死、津波に無一物になって…



―結婚生活を聞かせてください。

「昭和十（一九三五）年に結婚しました。主人（賢一さん）は隣村の出身で、満州国新京の日本大使館管轄課に勤めていました。やさしい気持ちの人でした。主人は単身赴任でしたが、翌年長男が生まれたので、しばらくして私も子どもと渡満しました」

―満州（中国東北部）の暮らしはいかがでしたか。

「新京（現在の長春）はとても良いところで、近所に満人の店もあり、何不自由なく生活していましたが、大分慣れてきた頃に牡丹江へ転勤になりました。郊外に住宅があつて、周囲は広々とした畑が続ぎ、小高い丘にスズランの花が咲き乱れていました。日曜日になるといつも、親子三人で川に魚釣りに出かけました。私の生涯で一番幸せな時期だったと思います」

―戦争が始まった頃は、どちらにいましたか。

「牡丹江の生活も僅かで、新京に戻りました。十六年六月に長女が生まれましたが、ある夜、主人が帰つての

話で、どうも戦争が始まるようだから、早く帰る支度をするようにというんです。本当に驚きましたが、仕方なく帰ることになりました」

―帰国されたんですね。

「長女の出産の世話に、内地から母と妹が来ていたので、子供二人を連れて五人で、主人一人残して内地に帰りました。主人はしばらくして役所を辞めて帰ってきました」

―ご主人は、内地で召集を受けたんですか。

「豊橋の軍隊に勤めることになり、一緒に豊橋で暮らすことになりましたが、十七年十月に召集を受け、京都の工兵隊に入隊しました。中支（中国中部）に渡り、十八年十二月七日、湖南省常德で戦死しました」

―その時は賀田（尾鷲市）の実家に帰っておられたんですね。

「子供たちと母の家に厄介になってたんですが、十九年



庄司早百合さん（右）とお友達（8月15日靖国神社で）

尾鷲市 庄司 早百合

【プロフィール】大正六（一九一七）年、南牟婁郡南輪内村（現尾鷲市）生まれ。昭和十（一九三五）年に十八歳で結婚。ご主人の仕事に伴い、子どもとともに満州に渡った。戦争開始直前に帰国の後、ご主人は軍に入隊し、昭和十八（一九四三）年に戦死。「東南海地震」「三重県南部集中豪雨」などに見舞われながらも懸命に生き、現在九十歳。

五月、夕暮れ時に公報を受けました。体中の血が、一度に凍りついてしまったように驚きました」

—ご主人の戦死後はどうされましたか。

「子供二人連れて遊んでもいられず、その年、百五銀行に入りました」

—東南海地震が起きた年ですね。

「十九年十二月七日、主人が戦死して一年過ぎた命日、時間も同じ頃に地震が起きました。津波に襲われ、浜通りにあつた私たちの家は、跡形もなく流れてしまいました。何一つ持ち出せず、一瞬にして無一物になりましたが、家族全員は無事避難することができたのは、不幸中の幸いでした。」

しばらく古江の主人の家で厄介になっていましたが、賀田に仮設住宅ができて入居しました。三軒長屋で、石屋根で台所もお風呂もなく、共同トイレ。本当にみじめな生活が続きました」

—終戦後の暮らしはどうでしたか。

「敗戦に終わり、食糧難も続いて苦しい時代でした。幸い母のやりくりのおかげで、どうにかひもじい思いもせずに住むことができました。二十一年十二月に、また津波が来ましたが、前のようなことはありませんでした。ところが、四十六（一九七二）年九月、今度は一週間近くも雨が降り続き、山津波が起きて、床上—メートルも浸水しました」

—尾鷲・熊野地方に大きな被害を出した「三重県南部集中豪雨」ですね。

「本当に悲しいことばかり続

きましたが、やっと家も建て、自分の家に住むことができました。仮設住宅から

転居した時、子供がとても

喜びました。でも、いつまた流されるか分かりませんので、避難場所にと、高いところに小さな家を建てました」

—今の暮らしはいかがですか。

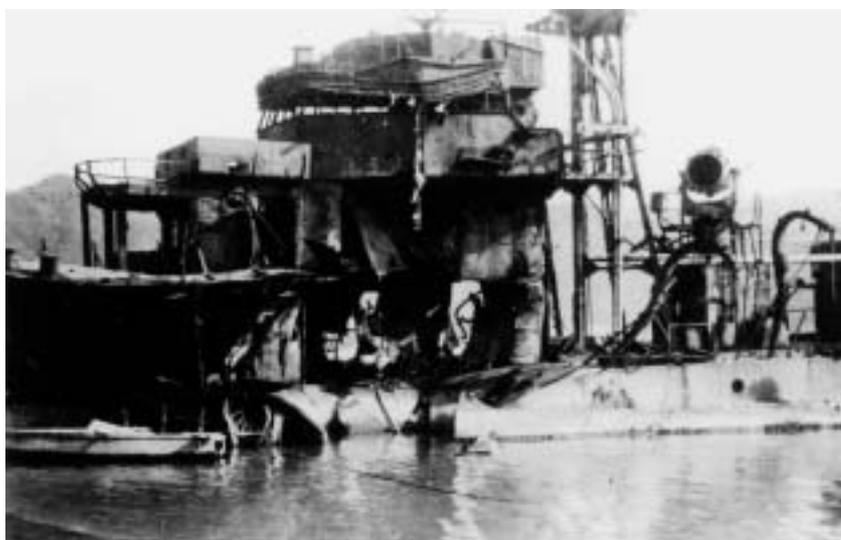
「苦労を共にしてきた子供たちもそれぞれ家庭を持ち、子も孫も出来ました。私も九十歳になりましたが、一人暮らしができるだけ幸せだと思います。若い時に主人に別れ、百年に一度という津波に二度、三百年に一度という山津波にまで会いました。苦労を重ねた人生でしたが、みなさまのおかげで、ここまでやってこられました。いつか主人に会うことが出来た時は、いろいろ話が山ほどあります。その日まで、元気ががんばりたいと思います」

【編集部注】

『熊野灘部隊壊滅』

昭和二十（一九四五）年七月二十八日、尾鷲港に集結していた海防艦「駒橋」以下の全艦艇が、米艦載機の空襲を受けて壊滅し、死者百四十七人を出した。

「いつか主人に会うことが出来た時は、いろいろ話が山ほどあります」



尾鷲港空襲で大破した第45号海防艦（三重平和祈念館蔵）